

いまの「ひろしま神楽」

はじめに

いまの「ひろしま神楽」は、かつての舞台であった「むら」から引き出され、芸能文化として市場化される時代を迎えています。

そのキッカケは、1993年、北広島町（旧：広島県北広島町）の中川戸神楽団が「神楽」を初めて広島市内のホールで開催した「スーパー神楽中川戸」公演が発端とされています。

当時、化粧・仕掛け・舞台美術等を駆使した演出が話題となりました。

以後、若い方を中心に、氏子以外の方が他地域から入団する状況も出てきています。

現在では、神楽団に入りたいために、地元就職する高校生やU・Iターンもあり、小史高齢化の中で一筋の明るさが見て取れます。

また、「神楽」が進化する芸能文化として商品化される中で、観光資源として注目されています。

全国に神楽は、保存伝承されていますが、「ひろしま神楽」は、興行として成立する他の地域とは異なった進化を遂げています。

※今の「ひろしま神楽」＝戦後まもなく作られて「新舞」あるいは90年代以降「新舞」に工夫と創作を加えたスーパー神楽とも呼ばれているものと定義しています。

ひろしま神楽の変貌

「ひろしま神楽」は、誕生以来その姿形を大きく変化させながら伝承されています。

軍事化（神国化）する明治、そして昭和20年の敗戦による政治的・経済的混乱、さらに戦後復興施策と高度経済成長期における産業構造の高度化など地域社会の転換期を迎えるたびに、神楽は大きく変わってきました。

1950年～60年代の高度経済成長期には、すさまじい勢いで農村から都市へ人が流出し、かつての農村社会の「共同」が崩壊しながら「近代化」という姿をみせました。

出稼ぎ・日雇い・通勤と、その移動形態は変質しながらも、中国山地の農村は生き残ってきました。

その間「過疎地域」と呼ばれ 現在では「限界集落」とも呼ばれています。

高度経済成長期、経済的豊かさと共に拡大した、余暇ビジネス戦略の中で、神楽は消費する文化となってきました。

近代化、都市化の中で「むら」の内から「むら」の外の人々となった人たちに対する余暇マーケットのニーズとして、ふるさとへの哀愁という要求に答えながら、かつて「むら」の神事・娯楽だった神楽は、公演の次元で大きく変容しながら存続してきました。

80年代に入ると中国自動車道の全線開通など、交通網が急速に整備され、就労・就学にはじまり日常の買い物等の時間距離も大幅に短縮し、広島県北西部の芸北地域(山県郡・旧高田郡)の農村は政令都市広島の広域生活圏域に組み込まれる形で拡大されていきました。

そして、人口流出傾向が底をついたのを機に、自治体は都市との交流を求める地域活性化への道を探り始めたのです。

沿岸部(工業)と内陸部(農業)との距離が近い広島県は、全国に先駆けて都市の肥大化、核家族化が進み、それだけに農村のコミュニティの崩壊は急速にやってきました。一方で、都市と農村の距離が近いことが地域の神事や娯楽として伝承されてきた神楽の存続を助ける要因にもなったと考えられます。都市と農村の距離が近いことで、早い時期に出稼ぎから日稼ぎ、通勤という形で人口流出が県内にとどまり、純農村部における「祭り」への帰省機会を容易にしました。それが県下 200 にも及ぶと言われる神楽団が消滅に至らなかった要因にもなっていると考えられます。

それでも、戦後の経済成長期に農村から都市への人口流出、農業の衰退など、いわゆる過疎化の急速な進展が神楽の舞手を失わせ、団の活動そのものを休止せざる得ないところを続出させた時期もありました。その神楽が復活の兆しをみせ始めたのは、過疎化が一息ついた 1970 年代末です。

その間、神楽を生き永らえさせたのは、神楽の競演大会でした。

戦後間もない 1947(昭和 22)年、初の神楽大会である「第 1 回芸北選抜神楽競演大会」が旧加計町(現安芸太田町)で開催。その翌年の 48 年には旧千代田町(現北広島町)で、「第 1 回芸石神楽競演大会」が開催され、1971 年には山県郡出身者で組織された山県郡友会主催による神楽大会(広島県神楽競演大会)が広島市内の体育館で初めて開催されています。

また島根県石見地方でも 1976 年、「第 1 回陰陽神楽競演大会」が邑智郡瑞穂町で開催され、同年六日市町では、「陰陽選抜神楽競演大会」が始まりました。

こうした競演大会は、主に二つの変化をもたらしました。

一つは、神楽が競技化されたことによって、各神楽団の舞・奏楽の技が磨かれ、レベルが上がって行った事。

二つは、神楽が氏神様への奉納というより、イベント性をもった芸能への変化が顕著になった事です。

「スーパー神楽」の登場

こうした時代背景のなかで、戦後まもなく創作された「新舞」にさらに派手な演出を加えた「新新舞」とも呼ばれる新作神楽が、都市部の大規模なホール会場で公演されました。

それはショーアップされ、さらに創作的演目を取り入れた新しいスタイルの「スーパー神楽」と呼ばれるものでした。

これはそれまでのように素朴さの残る農村芸能を一気にショーアップさせ芸術性を高めたものでした。また、豊作を祝い冬から春への再生を祈るために舞った神事としての神聖

な神楽とは異なる、市場性の高い都心の劇場ホールにおける観せるための神楽(商品)でした。そしてこの企画の大成功によって広島都心のホールでの企画が一気に浮上し、ひろしま神楽はさらに文化産業、観光ビジネスコンテンツへの傾向を強めていったのです。

このことは神楽公演をプロデュースする組織による特設ステージが登場することにつながりました。またこれまでの演目の演劇性を更に強めていくことにもなって、伝統的な農耕儀礼、神事とは決定的に離れていきました。

こうした演劇性の強い「スーパー神楽」は、1993年に開催された旧千代田町の中川戸神楽団を中心とする神楽団による広島市内のホール(アステールプラザ大ホール)での自主公演をきっかけとして注目されるようになりました。

このスーパー神楽へ出演した団体を核にして、1999年に第1回「RCC 早春神楽共演大会」が開催されています。今日この大会は、神楽の共演大会としては、都心で最大の神楽大会であり、神楽大会の最高峰として認知されています。また、同年競演大会の最高峰である「ひろしま神楽グランプリ」が「ひろしま神楽」の本場である安芸高田市にある神楽門前湯治村で始まり、その年のひろしま神楽(芸北神楽)のナンバーワンが選ばれるようになりました。

こうして競われ、磨かれた神楽の技は、2004年ロシア・サンクトペテルブルグ国立劇場において公演された(サンクトペテルブルグ建都300年記念事業)・東京国立劇場において、文化庁、駐日韓国大使主催による「日韓芸能交流公演—スーパー神楽とコリアンファンタジー」として公演され、更にはアメリカ、ヨーロッパ、中国とアジアや南米でも公演が繰り返される日本文化として注目されています。

平成24年、NPO世界主催の日中国交正常化40周年記念事業神楽公演(北京・大連)

平成27年10月には、NPOが、広島神楽団中南米神楽公演(広島県補助事業)を受託し、広島県の友好提携先であるメキシコ・グアナファ州が開催するセルバンティーノ国際芸術祭及びブラジル・サンパウロ州で開催されたブラジル広島県人会創立60周年記念式典(日伯修好120周年)で「広島神楽」の公演を開催しています。

平成29年9月27日には、広島神楽団として、2017年9月25日から10月3日にわたって開催された「フランスファッションウィーク」通称パリコレで、ファッションブランド「KENZO」から広島神楽への演出参加の依頼があり、Le Trianon劇場で広島神楽とファッションショーのコラボが実現しています。

(2)"神々の詩 '93 SUPER KAGURA 中川戸" 友情出演：上府神楽社中(島根県浜田市)、原田神楽団(高田郡高宮町)

ひろしま神楽の担い手

かつて神楽団員は「むら」の氏子(男性)に限定されていた時代がありました。それも農家の長男でなければ入団できないと言う厳しい規定を設けていた神楽団もあったのです。それが、1960年代からの農村部は過疎化によって団員不足等の問題が生じたことから、女性

や地元の氏子以外にも入団希望に門徒を開く神楽団がふえてきました。人気のある神楽団は、週3回の練習に2時間以上かけて通ってくる団員もいます。

団員の職業は、全体的に企業や行政関係等に従事しながら、親がやってきた農業とは全くかかわらない団員も大勢います。

演目の変化

神楽が競われ、または国内外に出張して演じられるようになると、神楽団の保持演目にも変化が現れるようになりました。

NPO 広島神楽芸術研究所の調査(2006年、マイクロソフト社研究助成)によると、80年代は、多くの神楽団で保持演目が減少していた。それが90年代以降、今度は逆に演目が増加傾向を示している。内訳をみると80年代には戦前から伝わる旧舞の演目が減少し、90年代以降は、新舞の演目や創作(オリジナル)の演目が増えています。

演目を減らした理由は「古い演目の役を舞える人がいなくなった。教える人がいなくなった」という「世代交代」と人手不足を挙げる団が最も多かった。神楽の舞は、人から人へ引き継がれるため、団員の不足は演目の継承だけでなく、神楽団の活動さえも困難にする要因となる。神楽団にとって団員の流出は死活問題です。そのため若い団員たちの心と体をつなぎとめ、新たな入団希望者を発掘するためには、スピード感があり演出も派手な新舞やオリジナルの創作演目を増やす必要もあったのです。

新舞や創作的な演目が増える一方で全体的な保持演目数が減っている理由の二つ目は、近年の競演・共演大会の増加が挙げられます。とくに競演大会において入賞するためには、得意演目や出場演目の練習だけに集中する必要があるからと考えられます。

イベント化する「ひろしま神楽」

今の「ひろしま神楽」は「見る人」という他者の目によって、他の芸能と相対化されるようになっており、またそれが経済的利益につながるような戦略がとられています。観る者から要求されるニーズを情報として内部化し、商品価値として外部化している。

こうした「ひろしま神楽」の流れを作ってきたのが、地元の商工業者が中心となって行っている競演・共演大会などのイベントです。地元商工業界は、工業化、都市化の進展によって崩壊する「農」と「むら」の中で、「ひろしま神楽」のイベント化を担ってきました。

いま神楽には、農村の人々だけでなく、都市の人たちにも伝統芸能、ふるさと、神秘的などのイメージが付加されるようになったことで神楽は「むら」と「まち」結びつけ、かつての芸能集団を思い起させる一面を見せています。

「神楽」としての個性、特徴、その存在は、かつてのものと認識されながらも、他の芸能と相対化されるかたちで、地域や場所を問わず各種イベントなどから出演・上演の依頼を受けるようになっていきます。

イベントへの出演や神楽大会における上演頻度は、競演大会の入賞神楽団ほど多く、ひ

ろしま神楽系の百数十団体の中で、年間の公演回数が 40～50 回を数えるところが 20～30 団体もあります。それでも、年に一度の「むら」の氏神様への奉納は神楽本来の姿として大切にされています。伝統的神事としての演目”神迎え”から神楽団自慢の演目と、盛りだくさんの演目を上演時間の縛りもなく深夜や朝方まで奉納しています。

一方、「むら」の外からのイベントに招待された舞台、あるいは大会に選抜されて舞う舞台では、あらかじめ上演時間が決められています。競演大会の場合、多くは 35 分。神楽団は上演時間に収まるように自ら舞を工夫したり、短縮したりしながら、本来の台本にある演目全体の中から見せ場とする所作を断片化することでコンパクトにまとめています。

新しい境地へ進むひろしま神楽

2009 年、広島県主催によって山王神楽団と広島交響楽団とのコラボレーションで創作神楽「オロチ(作曲、伴谷晃二)が上演されるなど、ひろしま神楽はさらに新しい境地を開拓しています。

都心のホールに 2000 人を集める RCC 早春神楽共演大会は、今年(2018 年)2 月で 20 回目を迎えています。

また島根県の石見神楽の本場でも広島流の「スーパー神楽」が受け入れられ、浸透しました。なかでも浜田市の亀山神楽社中による「貴船」は謡曲「鉄輪(かなわ)」をもとに作られた演目ですが、一部修正を加えることで、かえって能や歌舞伎とは違った神楽ならではの臨場感のある構成・演出となっており、新しい境地を開いた演目として注目されることとなりました。

2013 年度から、毎週水曜日の夜に、広島県民文化センターで、神楽ファンの裾野を広げようと定期公演が開催され広島の夜の観光コンテンツとして定着しています。

神楽を地域の観光の柱に据えようという行政の地域活性化施策は、農村の地域振興という枠を超えて広島の県勢振興という勢いを見せ、神楽は地域社会だけでなく、広く国内外の観光客に広島の観光資源として提供されるまでに成熟しています。

しかし、都市部で「神楽鑑賞」の機会が増加するなかで、神楽を守り育ててきた、県北の市町での神楽催事の動員数が減少傾向にあります。

都市部での神楽公演で、神楽に興味を持っていただき、神楽の本場である県北の市町へ観光客を誘導する仕組づくりが喫緊の課題となっています。